

近藤重蔵の史料

——史料編纂所所蔵「近藤重蔵遺書」に見る——

山口靜子

年号	西暦	干支	年数え
明和八	二毛一	辛卯	年數え
天明二元七	一毛一		
寛政元年	己酉		
庚戌	丁未		
20 19 17			

事項（洋数字は月・日）

江戸駒込難声ヶ窪に生れる。（御先手与力近藤右膳守知の三男）母は阿部伊豫守医師藤田隆本の女。白山義学を設立。

12先手与力見習となる。
7・22家督相続、先手与力となる。

史料編纂所には、昭和八年四月四日稻本角之助氏から購入した「近藤重蔵遺書」（以下「遺書」とする）四百余点が所蔵されている。その中には、多様な史料が含まれているが、本所では、本年度から、蝦夷地関係のものを選び、「大日本近世史料　近藤重蔵蝦夷地関係史料」として編纂出版することとなつた。この機会に、その編纂を担当したものの一人として、この「遺書」の概要について紹介することにした。

近藤重蔵は、寛政年間幕府の蝦夷地直轄に当つて、その前後、幕吏として蝦夷地を探検し、とくにエトロフ島に「大日本恵登呂府」の標柱を建てたことで著名であり、また御書物奉行として、また多数の著作によつて、ひろく知られている。その伝記もいろいろな形で紹介されている。そこで、ここでは「遺書」紹介の参考に、極く簡単な年譜を掲げておく。

寛政十二	寛政十一	寛政十	寛政九	寛政八	寛政七	寛政六
二八〇	二九九	二七九	二五七	二三五	二一五	一九五
庚申	己未	戊午	丁巳	乙卯	甲寅	
30	29	28	27	25	24	
閏4 出発。 4・23エトロフ島トリカマイ着。		2・26帰府。	10・15御勘定へ昇進。 19・20蝦夷地へ出發。 19・2サマニ着。越年。	2・10蝦夷地取締御用を命ぜられる。 6・19クナシリ島アトイヤ着。	6・5長崎奉行手附出役。 9・長崎着任、且安方を勤める。 4・長崎を発ち、帰府。	2・聖堂において学問吟味、褒賞を受ける。 6・5長崎奉行手附出役。

明治四十四年 万延元年 文政十二年 文政十一年 文政九年 文政五年 文政四年 文政三年 文化十三年 文化九年 文化五年 文化二年 文化一月	享和元年 享和二年 享和三年 享和四年 文化四月 文化五月 文化九月 文化十二月 文化十五月 文化十九月 文化二十五月	辛酉 辛酉 壬戌 癸亥 壬戌 壬戌 壬戌 壬戌 戊辰 巳午 亥巳 巳午 巳午 巳午	丁卯 癸亥 壬戌 壬戌 癸亥 巳午 巳午 巳午 巳午 巳午 巳午 巳午	31 32 33 37 38 42 46 49 51 52 57 59
8・9病歿。 31正五位を贈られる。	6・9病歿。 (2)3家齊十三回忌に当たり、家改易を赦される。	10・6長男の事件により家改易、家事不取締に付、近江大溝藩分部家へお預となる。	2・5江戸出発、2・20大溝着。	11・9松前着。12・8帰府。
8・2箱館にて、西蝦夷地リイシリ島辺見廻を命ぜられる。	9・19ソウヤ着。10テシオ川、イシカリ川経由	12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。	11・9松前着。12・8帰府。	8・2箱館にて、西蝦夷地リイシリ島辺見廻を命ぜられる。
9・23書物奉行となる。	1・22父死去。	1・22父死去。	9・15母死去。	9・15母死去。
11・大坂へ出発。	2・3大坂弓矢奉行を命ぜられる。	3小普請人差控を命ぜられる。	2・3大坂弓矢奉行を命ぜられる。	11・大坂へ出発。
12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。	12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。	12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。	12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。	12・15將軍家齊に謁見。12・28松前奉行手附出役。
13・白山郷約(「菅仲論」と合綴)	13・白山郷約(「菅仲論」と合綴)	13・白山郷約(「菅仲論」と合綴)	13・白山郷約(「菅仲論」と合綴)	13・白山郷約(「菅仲論」と合綴)
14・義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)	14・義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)	14・義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)	14・義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)	14・義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)
15・白山義学会日時表(覺)	15・白山義学会日時表(覺)	15・白山義学会日時表(覺)	15・白山義学会日時表(覺)	15・白山義学会日時表(覺)
16・學制私議(草案)	16・學制私議(草案)	16・學制私議(草案)	16・學制私議(草案)	16・學制私議(草案)
17エトロフ人別改を申渡す。	17エトロフ人別改を申渡す。	17エトロフ人別改を申渡す。	17エトロフ人別改を申渡す。	17エトロフ人別改を申渡す。
18・20出発。5エトロフへ渡海。	18・20出発。5エトロフへ渡海。	18・20出発。5エトロフへ渡海。	18・20出発。5エトロフへ渡海。	18・20出発。5エトロフへ渡海。
19・22永々御目見以上となる。	19・22永々御目見以上となる。	19・22永々御目見以上となる。	19・22永々御目見以上となる。	19・22永々御目見以上となる。
20・5蝦夷地へ出発。	20・5蝦夷地へ出発。	20・5蝦夷地へ出発。	20・5蝦夷地へ出発。	20・5蝦夷地へ出発。
21・12・15帰府。	21・12・15帰府。	21・12・15帰府。	21・12・15帰府。	21・12・15帰府。
22・12・25小普請方となる。	22・12・25小普請方となる。	22・12・25小普請方となる。	22・12・25小普請方となる。	22・12・25小普請方となる。
23・12・15江戸出発。	23・12・15江戸出発。	23・12・15江戸出発。	23・12・15江戸出発。	23・12・15江戸出発。

閏4・24ヲイト着。

12・帰府。

20・出発。5エトロフへ渡海。

11・27帰府。

12・12・15帰府。

「遺書」の目録としては、本所で作った「近藤重蔵遺書目録」(四一〇一~四一、四一〇〇一~五)がある。今、この史料群を目録の番号順によらず、私なりの解釈によって十の部類に分けて紹介しようと思う。検索の便宜の為に、「目録」記載の番号を洋数字で示し、その下に書名、点数を記し、注記は()内に示し、必要に応じ解題を添えることにした。なお、目録では296の史料には「書簡集」、298の史料には「諸家書簡集」と付してあるが、本稿では一々記することはしなかった。

一 白山義学と学制改革意見

重蔵は十七歳で、白山義学を設立したといわれるが、これに関するものに次の数点がある。

71 白山郷約(「菅仲論」と合綴)

「修齊会約」とした題名を墨線で消して、「白山郷約」としている。内題は

61 義学制(題名の所に「寄合稽古所申合」と朱書のある草稿)

284 学制(寛政三年七月)

以上の二点は、義学の教育の趣旨を述べたもの。

282 白山義学会日時表(覺)

287 義学教授姓名(覺)

以上の二点は、毎月の会日と学習内容(武術、軍学、故実、算術、四書五經、書道、歴史綱鑑、続日本紀、東鑑、樂など)、教授の名を記したもので、屋

代弘賢、本多利明、塙保己都等の名もあり、重蔵は学主となっている。

65 學制私議(草案)

62 學制私議(草案)

以上二点は、共に幕府の学制改革に関する意見書で重蔵の考え方が示されていて興味深い。年代は不明である。

月まで長崎にあって自安方を勤めた。この間、「唐人共へ唐土の風俗相尋、絵図訳書に仕八冊に取立、清俗紀聞と題号仕、則飛驒守開版仕」、

またオランダ人に本草物産類のことを尋ねて、四五部の本の翻訳を取扱い、異国への漂流人を吟味して安南紀略三冊、天川紀略一冊を著し、外国通書略十二巻、外国書翰二巻を著したといふ。⁽⁴⁾この間に重蔵が筆写したり、作成したものとしては「遺書」中に次のものがある。

26 寛文七年未両年異國風説書之写

寛文六年咬啞吧出し老番船之阿蘭陀口書」と「寛文七年咬啞吧出し壹番船

ニ申越候覺」の写。

27 長崎港来販船主等口上書（写）（寛延四年閏六月）

一通

一冊

40 異國貿易史料

正徳五年の申渡条々等の写。

1バ ッティラの図（紅毛傳馬船圖）

重蔵が寛政七年九月廿五日オランダ船へ検使として赴く時に乗つたオランダの伝馬船の性能のすぐれでいることに感心して描いたもので、識語に寛政八年十月長崎鎮府に於て記すとある。

一枚

93 西洋船図

船と船具、人物等が描かれている。

一枚

103 船之図

一枚

165 安南風景図

一枚

166 安南風俗図

一枚

162 唐土風景図

一枚

163 唐土名所図

一枚

164 唐土人物図

一枚

30 杭州四季風俗（未十月彭城藤治右衛門・同倫左衛門・二木幸三郎）

一枚

唐人共より聞書報告書の写。

42 万国標旗図

一枚

寛政八年九月長崎において数本をもつて校正した旨記されている。

67 横座諸品訳稿

フリハント（象）、レーリヨム（百合）等動植物、石の語訳と注釈を記す。

120 雜稿十「本草存真図説 八卷」（蘭書解題）

オランダ其他の本草学、医学書の解題。

286 寛政八年八月二十三日戦国武将長崎邑主長崎昭威をたたえて建てた碑陰記。

287 長崎昭威君碑陰記（草案）

一枚

125 正斎手記「南口御取締之儀云々」（草案）

一枚

300 外國關係書翰

二冊

元和六年正月十日の朱印状以下、朝鮮、カンボチヤ、オランダ、ジャカタラ、イギリス、ルソンの文書十七通の写本で、長崎奉行所所蔵の文書の写と、自分所持の写本とを合本したもの。寛政九年六月の重蔵の奥書の中に、

「備他日輪軸之一考云」とあり、江戸帰還直後にまとめたのである。

81 御交代中勤方（五冊之内巻）

一枚

内題「長崎在勤中検使勤方実録」。五冊の内の「だけしかないのが惜しまれる。東大図書館所蔵の「長崎従御着年中諸事勤之帳」は奉行の勤方を記したものであるが、こちらは下役検使方のそれを知るために利用できる史料で、

重蔵が勤務のために用いた写本であろう。

三 蝦夷地関係

近藤重蔵は、寛政十年四月以降五度蝦夷地へ派遣された。それに関する史料は、まとまつた形ではないが、一定の分量が残されており、一つの史料群として把えられる。特徴的なことは、上申書や書簡の類の草稿が多いことである。しかもまた、それらの草稿は、訂正・加筆がきわめて多く、そのため、その作成過程における彼の配慮や心のうごきをつなぎに見ることが出来ることがある。「勤書」によれば、寛政九年、蝦夷地と長崎に関する意見を「松前蝦夷地御处置之儀異国境御取締之儀存寄候趣書付」一冊と「薩州抜荷御取締筋之義并天草久玉山へ御番所御取立

有之可然儀等存寄書付」一冊として勘定奉行中川飛驒守忠英を通じて若年寄堀田撰津守正敦へ提出した。

123 18 正斎手記「近世以来年々蠻船渡来云々」(草案)

一綴

123 15 正斎手記「我邦異國と通路の場所云々」(草案)

一綴

は、ともにこれら意見書の草稿であろう。

123 11 正斎手記「北方一件之鄙策云々」(寛政十年二月三日)(草案)一枚

一綴

この記事によると、翌年二月前年提出した上申書に対する下間に答えて加筆し提出したいきさつと、「北行日記」(5)の書写を進呈したことがわかる。

以下、毎年史料をまとめてみよう。

寛政十年

119 先触写(近藤重蔵内佐々木良助)

一綴

123 19 正斎手記「蝦夷地通行道順之儀申上候書付」(五月廿日控)

一綴

296 8 正斎手記「蝦夷地經廻留書」(控)

一通

以上二通の内、前者は松前にて重蔵が上司三橋藤右衛門成方へ上申した踏査の計画についての書付と口上覚。後者は口上覚のみ。

27 正斎手記(覚帳)

一冊

重蔵の手控で、報告書、伺書の草案等を収める。アツケン絵乙名イコトイ、

ウルツブ在留のロシア人、アイヌ人の風俗生活、カムサツカ迄の島々の状態、

重蔵のエトロフ渡航、松前藩の対応、そして彼の対策意見が、詳しくするされている。これらが幕府の方針に、どのように取上げられたか、興味深い。

123 24 正斎手記「擬進賢之私表」(草案)

一綴

寛政十年九月、阿部主計頭(正精、福山藩主の子)を対ロシア交渉の役に推薦した上申書。

112 最上徳内書状(七月廿三日~十月七日)

一綴

重蔵の隨員として、おくれて命を受けて出発した最上徳内が、蝦夷地踏査の経験者として細かな配慮をしたためた十九通の書状原本と、帰府した徳内が撰津守(若年寄堀田正敦)、左近将監(勘定奉行石川忠房)の屋敷へ出向いて対面した時の問答を記していく興味深い。

196 道標拓本

三卷

201 「厚岸明神」碑拓本

一卷

200 「東山近藤重蔵泊」拓本

一卷

197 近藤重蔵所建碑「おぼへ」拓本
重蔵がアンケシ滝在中に建てた標柱の拓本。本誌別掲鈴木圭吾氏報告参照。

一卷

198 ルベシベツ・ビタタヌンケ間の山道を開鑿した時建てたもの。

一卷

202 「大神宮」碑拓本

一冊

19 蝦夷地巡見御用御入用御勘定帳(写)
蝦夷地御用掛渡辺久蔵・大河内善兵衛・三橋藤右衛門連名で寛政十一年正月に提出した報告書の写。

寛政十一年

正月十六日幕府の東蝦夷地収公という新情勢のもと、重蔵はエトロフ掛を希望し、実現するが、この年は天候の都合で渡海できなかつた。

118 蝦夷地旅程表(松前表ヨリアツケシ迄)未二月四日
重蔵の日程とは一致しない。泊休の区別が指示通り○△の記号で鉛筆書きされているが、當時鉛筆が使われたのか、後の人の記入か、疑問が残る。

296 11 御証文ニ対スル松前人蝦夷人等ノ礼法伺書付(控)
松前藩に対して前年の例を問合せたもの。

123 3 正斎手記「此度御用之御趣意者云々」(六月三日草案)
山田鯉兵衛と連名の、会所の状況等の報告書。異筆。

123 17 正斎手記「御用地之内山林之様子云々」(六月四日草案)
同じく連名の、御用地山林の木品の利益の見積書と会所仕法についての報告並に意見書。異筆。

123 20 正斎手記「イコトイ儀云々」(草案)
123 21 正斎手記「一筆啓上仕候云々」(草案)
123 22 正斎手記「赤人申聞候者云々」(草案)
以上三点はイコトイ扱方、ウルツブ赤人問題、エトロフ開拓の意見上申書。

123 27 正斎手記「此方蝦夷と赤人之蝦夷と」云々(草案)
これは前書の下書のように思われる。

123 9 正斎手記「風説書」

これは123 22の一部を清書しかけたもの。

一枚

115 リュス録（断簡）

これは123 21と同様の内容の草稿を小さく切ったもの。

四片

寛政十二年

前年には帰府せず、サマニで越冬した重蔵は、閏四月高田屋嘉兵衛の協力を得て、山田鯉兵衛とエトロフ島へ渡り、同島を日本地としてその經營に着手した。

296 17 松平信濃守宛書状

二月廿四日

サマニで越冬した重蔵が、エトロフ渡海の予定を報告した書状に、蝦夷地御用掛の上司三名の付ヶ札がついて戻ってきたもの。

124 正斎手記「先使三郎右衛門迄被仰下候御内書之内云々」（草案）

一綴

共に越冬した村上三郎右衛門常福を讒邪奸佞と非難する上申書。

123 6 正斎手記「蝦夷地御処置之儀云々」（四月十七日、草案）

一綴

村上三郎右衛門を非難し林大学頭（述斎）の力添えを求める書状一通と、同じくもとの上司で勘定奉行の中川忠英にあたした書状一通。

123 8 正斎手記「先使三月廿四日附四月六日附両度之書状云々」（草案）

一綴

林述斎にあたした123 6と同趣旨の書状。

以上の三点は、非常に激烈的な調子で記されており、閣老參政へ上申し三郎右衛門を枢要の位置へ再任せないでほしいと歎願しており、越冬の間にどんな軋轢があつたのか、幕吏間の内部対立をうかがわせる珍しい史料である。

298 30 三橋成方書状

一通

四月廿一日箱館に到着した三橋藤右衛門が重蔵に宛ててしるした書状。

21 恵登呂府会所日記（寛政十二年四月より）

一冊

四月廿一日、五月廿三日の記事。会所はライトに建てた。一部分異筆。

24 恵登呂府書（五月五日便 草案）

一冊

エトロフの状況を逐次報告した用状。
恵登呂府村々人別帳（寛政十二年六月、控）
アイヌ人の改俗、改名、役付なども記入されている。

一冊

23 江都呂府嶋内且根茂居鯨鰐諸納屋材木皮萱其外凡積控

一冊

123 12 正斎手記（しもしり蝦夷イチヤンケムシゑとる府え渡來之儀ニ付申上候書付「海防の御手当」云々の後に合綴）（十二月草案）

一綴

ウルツブ在留の赤人（ロシア人）のもとを逃れて渡來したイチヤンケムシと妻子についての報告書。なお「海防の御手当」云々の方は、海防と国政に関する意見書草案だが、年代は未詳。

123 7 正斎手記「恵登呂府蝦夷人風俗相改申度儀ニ付奉伺候書付」（草案）

一綴

羽太正養「休明光記」附録に収録されているものの草案。イコトイ桦の溺死についての報告書不備の為、帰府した重蔵が記した進退伺等の下書類も合綴。

享和元年

この年のエトロフ行きについては、「勤書」に簡単な記事があり、史料は左の一点が存するのみである。

18 享和元年辛酉日記（改過遷善陰行録）

一冊

これは雑然とメモの書かれた小さな手帳である。ただ表紙の裏に「享和元年五月六日恵登呂府之役在安焉丸船中申上刻」云々とあるのが、蝦夷地関係の記事である。

享和二年

120 御朱印并御証文写

一綴

四月五日出発、十二月十五日帰府。この時の道中人足、御用長持に關する四月四日朱印状の写等で、十一月廿三日～廿九日の休泊割もある。

文化元年

重蔵は、この年十月、西蝦夷地上地を建言、下問を受けて再建言する。

297 297 8 正斎文書「右様之利害得失も云々」（子十月草案）

一通

4 正斎文書「別紙地理圖説を以申上候通り云々」（草案）

一通

この二通は、十月の建言書草案である。後者は端裏に「魯細亞渡來ニ付異國境御取ノ御処置之義心附候趣御内密申上候書付」とあり、朱で「子十月六日采女正殿へ出ス」「上へ出候處ニヶ条御尋ニ而采女正殿被仰渡云々」とある。

- 123 1 正斎手記「カラフト品々明年松前より見分云々」(草案) 一級
123 13 正斎手記「先達と申上候西蝦夷地カラフト云々」(草案) 一級
以上二綴は再建言の草案である。

文化四年

文化元年長崎へ渡来したロシア使節レザノフは、かつて幕府がラクスマンに与えた信牌を持参して通商を求めたが、拒否された。そのため、文化三年九月、ロシア人がカラフトの運上屋を、同四年四・五月にはエトロフの会所、カラフトの番屋を襲撃する事件がおこった。幕府は文化四年三月二十二日西蝦夷地を直轄とした。その六月、堀田正敦・中川忠英以下五十数名の幕吏が蝦夷地へ派遣され、重蔵も派遣された。

83 松前辺御見廻御供方姓名

これはその姓名書の手控である。

48 蝦夷地御用留

六月から十二月廿六日までの用状、伺書等の写の綴で、重蔵の踏査の足跡を知ることができる。

84 金銀遣払帳

この年の蝦夷地踏査に関する重蔵個人の收支帳である。

123 16 正斎手記「以御用状申上候云々」(草案)

一綴

48 中にも収録されている田草川伝次郎(小人目付)、山田忠兵衛(鷹野方)と

近藤重蔵の連名で遠山左衛門尉景晉へ宛てた九月朔日の用状と添触の草稿。

9 蝦夷図(天塩川筋図)

一卷

297 3 正斎文書「石狩川筋云々」(石狩川筋図)

一卷

以上の二点は、重蔵がソウヤからの帰途、天塩川を溯行して石狩川へ出た道筋の行程図である。

297 7 正斎文書「カラフト之義者云々」(草案)

一綴

カラフトの処置についての建言書草案。「事蹟考」所収の勤書の中に、「からふと奥地異国境御取締之儀數冊ニ認絵図面添差上」とあるものに当ると考え、文化四年と推定した。

年代未確定のものその他

- 123 2 正斎手記「此處にて多く舟を作ることゆへに云々」(草案) 一級
123 13 正斎手記「辺要分界図考」を書き上げた頃に記したものか。
8 蝦夷風景図(シヤマニ海岸之岩其他之図) 一級
4 蝦夷來由記 絵画類等 多種の意見書の草案をとじ合せたもの。

296 15 蝦夷経略心得(草案)

一通

158 ロシヤ人図

一卷

161 カラフト嶋夷トモ狗ニ舟ヲ引カセル図

一枚

162 露人服裝図

一枚

163 蝦夷図類 一三(ロシア文字標柱図)

一枚

164 上衣・下衣等を精細に描いた彩色図。

一枚

160 蝦夷人図

一枚

159 カラフト夷人図(山東雪画)

一枚

205 露西亞文字拓本

一枚

126 13 蝦夷図類 一三(ロシア文字標柱図)

一枚

125 1 蝦夷地図(蝦夷地絵図)

一枚

寛政九年提出した蝦夷地に関する建言書の添図の下図として、先人の作った図を参考にして作った本島全図であろうか。目論見を各所に記入し、下部に説明文があり、寛政九年十一月近藤守重手写と記されている。

125 2 蝶夷地図(戸勝川絵図)

一枚

戸勝地方の山・川・植生・聚落など詳細に記入した大型の絵図。

- 125 3 蝦夷地図 (メアカン岳阿寒湖屈斜路湖絵図)
- 125 4 蝦夷地図
- 126 1 蝦夷図類一 (ウルンブ島図)
- 126 2 蝦夷図類二 (エトロフ会所の図)
- 126 3 蝦夷図類三 (リイシリ島図)
- 126 4 蝦夷図類四 (レブンシリ島図)
- 以上の二図は、両島へ渡る予定であった重蔵が、天候の都合で、実行できなかつたため、聞き取りによつて作成したものであろうか。この時の行程は文化四年48蝦夷地御用留参照。
- 126 5 蝦夷図類五 (アブタ石狩行程図)
- 126 6 蝦夷図類六 (扇面地図の画稿)
- 126 7 蝦夷図類七 (エトロフ陣屋周辺図)
- シナ川両岸に陣屋・城・勤番所・漁屋等を描く。
- 126 8 蝦夷図類八 (アバシリ・シレトコ・間里程図)
- 126 9 蝦夷図類九 (サカリソニク)
- 『邊要分界図考』所収の図の原図であろうか。同書卷之二参考。
- 126 10 蝦夷図類一〇 (樺太地図)
- 126 11 蝦夷図類一一 (テウレ島ヤンゲ島図)
- 俯瞰図。運上屋・番屋・社・川の名等が入つてゐる。
- 126 12 蝦夷図類一二
- 126 13 蝦夷図類一四 (間宮林咸筆樺太海峡図、封筒共)
- 126 14 蝦夷図類一五 (東北アジア日本太平洋の図)
- (1) 蝦夷及びその周辺図、(2) 東アジア・日本・北アメリカ等の図、(3)(4)は各(1)(2)の下絵、(5)松前以北の図、(6)黒龍江略図。
- 文化五年
- 126 東西蝦夷地見廻口上書 (草案)
- 二通
- 一通は文化四年の西蝦夷地調査にあたつた重蔵の一行三人の手当金が、他に比して不當に少いので、善処方を願う遠山景晉 (目付、蝦夷地御用) の上申書。重蔵筆の草案は「二月」とあり、紙の中程から別の紙が上に貼つてあ

り、別筆で訂正文がしるされ、末尾に「辰二月 遠山左衛門」とある。他の一通は重蔵が蝦夷地見廻の御用金の精算方法についてしるしたもので、末尾に「辰二月御名」と記されている。

参考にした書物類

- 10 西蝦夷地分間 一冊

- 44 蝦夷草紙 (最上徳内著) 上・下 二冊

- 扉に「天明六年西蝦夷地分間 近藤重蔵控」卷末に「寛政戊午三月近藤守重」とある写本。天明六年蝦夷地巡見の記録。

- 44 蝦夷草紙 (最上徳内著) 上・下 二冊

- 徳内自筆本。下冊の後半に、蝦夷地収納運上金帳、諸役運上金帳、蝦夷地交易直段付帳、カラフト人交易直段付帳、松前交易直段付帳、船出入大凡帳の写本六点 (天明六八年) を収録。この部分は松前町史史料編第三巻に収載。

- 28 蝦夷久奈尻騷動略記一件 (日高見草) 一冊

- 原表紙に「日高見草」とある。「寛政元年己酉五月以来蝦夷久奈尻騷動略記一件」の末尾に「近藤重蔵写し」とあり、次に利倉入道雲、倉著「不知松前漸」の写がある。

- 25 加摸西葛杜加國風説考 一冊

- 天明三年正月と、天明元年四月二十一日の奥書のある本の写。欄外に「守重云」云々の朱筆書きが二カ所ある。

- 29 北辺探事補遺附言。 内題「北辺探事補遺附言」 一冊

- 15 蝦夷人談筆記 一冊

- 蝦夷地の状況、風俗、シャクンヤイン一揆の事等をしるしたもの。写本で、末に「寛政三辛亥年四月望写之」の記がある。

- 16 松前家数人別其外留 (寛政十年) 一冊

- 小口書に「松前雜記」とある。寛政十年幕府の蝦夷地御用の役人渡辺久藏胤等の調査報告書の写等で、松前家数人別其外留 (松前、東西蝦夷地の人数、諸役、船掛潤、松前家来人別、在町人別)、亀田御条目、当所并東西村々寺社数が入つてゐる。

四 小普請方関係

重蔵は、享和三年正月から文化五年一月まで小普請方をつとめており、これに関する史料が二点ある。

121 千駄木御齋部屋向御取繕洗掃除其外御用留

享和三年十二月廿五日から翌文化元年三月晦日迄の記事がある。

一冊

105 建築図（柱石・栗石打込の図面と建物側面図。一枚は尚古的蒐集品）三枚

五 書物奉行関係

文化五年（一八〇八）三月朔日、書物奉行に任せられた重蔵は、文政二年（一八一九）二月まで十一年間、この役にあった。

110 正斎日記

明日御城へ出よとの命令を受けた二月廿九日から、二月晦日書物奉行に任せ

一冊

126 明日、五月廿九日までの日記。

一通

126 御書物藏之儀ニ付心附口上書 午二月

一通

文庫の書籍管理について文化七年二月建言書の控。貴重本の保管、風入、摩

減した本の校合の必要、樟腦の増量等について上から御沙汰下さるか、または書物奉行連名で申上ぐべきか、御内慮を伺いたいとする。

1 紅葉山御書物藏内東御藏宅棟惣御修復并模様替之儀奉願候書付（控） 丑九月

一通

文化十四年九月、書物奉行近藤重蔵・鈴木岩次郎・高橋作左衛門・夏目勇次郎連名による、貴重書収蔵庫の修築、書籍修復についての建案の控。

一綴

123 正斎手記「教通有之候云々」

一綴

書物校合に関する先例の書抜。

一通

297 正斎文書「学問所において出来る官刻書籍之内云々」（写） 一通

文化十二年十月文章規範復刻のため重蔵所持の朝鮮版を学問所へ納めさせ、銀五枚ほどを下賜してはとの林述齋の同書草案を、重蔵が写したもの。

一冊

「遺書」の中には古文物の影写、双钩、模写、などが多数含まれている。大まかに分類すれば、次の如くである。

△画像写／133 義家出陣図、134 萩生徂徠画像、157 野見宿禰像等二十五点。△扁額／217 布留社額、219 日光陽明門額、233 上州今熊野村熊野權現額等十八点。△銘文写／199 今熊野鐘銘拓本等三点。△古器物図及目録／2 古物図等十点。△有職故実／3 大嘗会御図（安永四年十月）等三点。△縁起／5 若一王子縁起（中）一巻。△武具図／76 德川幕府合印、92 武器武具之図等三点。△陵墓図／108 御代々御陵之図一巻。△服飾図／80 式内染鑑、96 古服飾図等三点。△貨幣／100 支那古錢之図等三點。△絵図地図／129 山城国図等四点。△合戔図／170 絵巻一巻。△動物図／132 1 河童図以下八点。△古文書写／238 東大寺關係文書以下四十七点。

△その他／99 様脣名所之図

107 諸脣各部分の名称を示す。

241 群書治要奥書集

45 貨鑑（最上常矩（徳内）筆）

177 古玉虎耳彌（文化七年正月八日源（屋代）弘賢識）

45 貨鑑（最上常矩（徳内）筆）

177 古玉虎耳彌（文化七年正月八日源（屋代）弘賢識）

1 これららの蒐集にあたっての着眼は、寛政年間、松平定信が編した「集古十種」に実によく似ている。その写は、谷文晁や屋代弘賢等から借りて写したもの、多賀常政等からもらつたもの、野間正順の写したもの等もある。

32 武家官位称呼附武家裝束皆具略記（写本）

1 古器図説

1 その末尾には、寛政七年六月義学塾長嶋惟親の奥書があり、重蔵が長崎赴任の命を受けて多忙な為、長嶋に写させたことが記されている。

1 一冊

六 尚古的蒐集品

このほか、当時木版として出版されていたものには、

188 神世太刀之眞形拓本、203 新莽長宣子孫鑑拓本（平務廉識語）、213 阿育王宝塔

（文政三年源弘賢識語）214 宇佐八幡宮藏天復鐘銘（文政七年山崎美成識語）

がある。

なお、番外に、「梶井宮御所蔵鏡直垂袴鑑型」等の鑑型、古旗鑑型、源大將軍旗袋模造等八点がある。

明治初年横山由清著『尚古図錄』の松園道人の跋文（明治二年）中に、「文化中一二耆宿結社為古物常鑑之会、筆而伝之、名耽奇漫錄」とあり、文化年間、古器物を鑑賞する会のあったことがわかる。重蔵もこのような会の周辺にいたのであろう。

七 編著書

重蔵の編著書はきわめて多い。その書名は「事蹟考」に列挙されているのでここではふれない。「遺書」中、編著書の刊本は七点のみである。

50 正斎書籍考一・二（経部）（文政六年刊）

二冊

46 金銀図銀 文化七年八月

六枚

209 尚古図錄

一枚

212 朱熹筆跡 冊子本の一部が一枚刷か不明。中国の壺の写図と説明文の木版刷である。

一枚

210 周易注疏奥書（文化十五年刊）

一枚

211 楠山文庫他古鈔本題字并奥書集（文政二年刊）

一枚

212 朱熹筆跡

一枚

この三点は、「近藤重蔵模刻」となっているが210には、「因摹刻以伝好事家」としており、当時、同好の人々に頒布したことが知られる。

215 五十音図（享和二年正月。縦211種、横10種）

一枚

イロハ四七文字の他東西南北と数字に仮名とアイヌ語をつけて刷ったもの。ほかに草稿原稿類では

70 正斎先生唐本書目考（原稿）

二冊

51 正斎書籍考原本（原稿）

一冊

52 正斎書籍考草稿

十四冊

- | | |
|---|------|
| 53 御本日記附註（上・中・下）文化十二年四月（原稿） | 三冊 |
| 54 御本日記附註、文化十二年四月十七日（原稿） | 一冊 |
| 55 御本日記続録（上・中・下）文化十二年四月（原稿） | 三冊 |
| 56 右文故事（原稿と清書本） | 三十七冊 |
| 57 御写本譜 卷上（原稿） | 一冊 |
| 58 御代々文事表 卷一（原稿） | 一冊 |
| 59 御代々御詩歌 卷下（原稿） | 一冊 |
| 60 刻書考（切り貼り原稿） | 一冊 |
| 61 外蕃通書（原稿） | 一冊 |
| 62 正斎隨筆草稿 | 一冊 |
| 63 正斎茶談（ ^{乙所カ} ）（七九年）春正月八日夕方から夜半にかけて一気にしたるもので、その農政觀がうかがえて興味深い。 | 一冊 |
| 64 宽政笑卯の春正月上杉憲美伝稿 | 一冊 |
| 65 菅仲論（白山郷約と合綴） | 一冊 |
| 66 2 雜稿「叙」（文政三年正月） | 一冊 |
| 67 12 雜稿「書金沢足利本題跋後」 | 一冊 |
| 68 13 農政茶談 | 一冊 |
| 69 14 積善之記 | 一冊 |
| 70 15 北条実時上杉憲美伝稿 | 一冊 |
| 71 16 上梁文 寛政六年正月 | 一冊 |
| 72 17 多賀三太夫中原常政翁伝 | 一冊 |
| 73 18 優理論稿 | 一冊 |
| 74 19 万国旗印之図（42万国旗印のことか）の写取を希望する者が多く、御国用にも役立つべく、藏版翻刻したいとの伺書。文化四、五年頃。 | 一通 |
| 75 20 36 諸家書簡集（無署名、「覺」八月） | 一通 |
| 76 21 外蕃通書廿八冊（二帙）について重蔵のしるした代金の計算書である。 | 一通 |

「合

百七十九匁七分、右之通御座候以上」と結んでいる。

34 令条分類并外國事案

編纂の体裁についての伺書の草案か控。

296 13 五經定本取立申度儀ニ付御内慮奉伺候書付⁽⁸⁾

文化十三年十一月の伺書の写本からの写である。五經の校合、開版の御用を仰付けられたいとの伺書。「事蹟考」所収。

296 7 進献書籍目録

文化元年「辺要分界図考」献上から、文政元年十月憲教類典増補校正出役就任までの所持の書籍や編著書の献上、銀子頂戴の事を記した提出書付の控。

296 10 著述之書籍献上仕度御内慮奉伺候書付

端裏に「著述之書籍追々大坂表々獻上仕度御内慮奉伺候書付」とあり、文政二年十月十一日提出の伺書の控である。草稿のままの右文故事以下の本を、大坂在勤の間に清書して追々献上したいとのべている。

296 6 著述之書籍献上仕度御内慮奉伺候書付

296 10 の一件について文政二年十二月四日提出書付の控。

293 進献書冊記

「富士之煙」以下の書籍献上について、文政三年四月十七日の記の草稿。

八 身上に関する史料

重蔵の勤書（文化九年）は、「事蹟考」に収録されているので、ひろく伝記に利用されて来た。本所には、「親類書」（控）がある。重蔵の経歴を見ていくと、勘定方として蝦夷地御用において実績を揚げ、御家人から御目見以上（旗本）に取り立てられた。普請方、書物奉行への転進は、榮転であろうが、彼自身としては、どう感じていたのだろうか。又、大坂弓矢奉行への転任はどうだったのだろうかという疑問がわいてくる。これに答えてくれる史料は数少いが、貴重な伝記史料といえるだろう。

60 親類書（控）

文政二年十一月、大坂城代松平右京大夫へ（他の一人の城代へも各一通宛）

一冊

提出したもののが控で、経歴については、勤書と同様の書き方で、文化九年以後、文政二年二月三日大坂弓矢奉行に任せられるまでを書きついであるが、これにつづく「親類書」によつて、祖父母、父母、兄（父実方の叔父の家を継いだ町医師福間藤次）、母方の叔父で松前奉行支配調役三浦義十郎や、男

二人、女二人の子について知ることが出来るが、妻の記載はない。

296 13 勤書（写、「五經定本取立申度儀ニ付御内慮奉伺候書付」所収）

明治二十五年、重蔵の孫近藤昂藏が写したもの。

296 3 左遷赦免口上書（草案）

正月九日付、宛名「台下執事」

297 12 正斎文書「此間申上候一件之義云々」（草案）

正月十九日付、相手を先生と呼んでいる。他の文書から推して、彼の最も信頼する一人林述齋であつて、前書同様の内容の懇願である。蝦夷地で、これだけの働くした身なのに、奸人の言に任せて閣老參政が判断を下されでは遺憾であると、蝦夷地御用掛だつた人々の榮転をのべ、よろしく取はかわれたいと願つてゐる。享和二年と推定されるが、そうとすれば、この数日後、小普請方を命ぜられている。

297 6 正斎文書「此間御密訴申上候一件云々」（草案）

正月十九日付。相手を先生と呼んでいる。他の文書から推して、彼の最も信頼する一人林述齋であつて、前書同様の内容の懇願である。蝦夷地で、これだけの働くした身なのに、奸人の言に任せて閣老參政が判断を下されでは遺憾であると、蝦夷地御用掛だつた人々の榮転をのべ、よろしく取はかわれたいと願つてゐる。享和二年と推定されるが、そうとすれば、この数日後、

297 5 正斎文書「私儀書物奉行もはや三ヶ年相勤申候云々」（草案）

正月十二日付。内容からみて、文化七年と推定。宛名の「閣下」は信頼する一人若年寄堀田正敦であろうか。御書物奉行の職が閑暇過ぎるので今一度御用多き場所へつけてほしい旨、勘定吟味役の二人が転任になつたので明き跡への転出を懇願している。

296 4 緑高口上書（午正月草案）

一通

文化七年正月、野田彦之進、増嶋藤之助、長崎四郎左衛門（共に書物奉行）連名の前書同様の歎願書で重蔵の書いた草稿。これらの歎願は容れられず、

重蔵は足かけ十二年を書物奉行に甘んじなければならなかつた。

123 26 正斎手記「昨廿五日於御殿云々」（草案） 一通
文化七年か八年。相手を御前様と呼ぶ。勘定吟味役への任命が、叶わぬなら代官にでもと歎願。

124 役目昇進ノ願書（草案）

一通

蝦夷地御用として、又書物奉行としての自分の功績をのべ、蝦夷地御用中同役相掛りだつた高橋三平（重賢）が一昨日格別結構仰られ、自分も今少し御用多き場所で精勤したいと内々願い上げるというもの。文政元年二月八日三平は佐渡奉行になつてるので、この文書は文政元年のものと推定される。

125 御加番より送物之儀ニ付奉伺候書付（草案）

一通

文政二年十一月、大坂着任にさいして御加番からの贈物を受けてよいか否かを伺つたもの。

126 1 正斎文書「君美一生人に対して不可言なしとは云々」（草案）

一通

文政四年三月、大坂弓矢奉行を罷免され、小普請入差控を命ぜられての憤懣やるかたなき心境を子孫に伝えるために綴つたもので、「勤方不相応」という理由に納得のいかないことを繰々と述べている。

127 2 正斎文書「私儀大坂御弓矢奉行相勤罷在候云々」（草案）

一通

大坂から江戸へ戻るに際し支度入用として借りた大坂町奉行所貸付金四貫目の返済が困難なので長年賦にしてほしいといふもの。宛名はない。

128 3 雜稿「私墳墓構之内洞穴ニ差置候甲冑を着候石像之儀者云々」（草案）

一通

文化五年滝ノ川文庫の境内に自分の甲冑像（谷文晁原画）を建設し、咎を受けた時、弁明のために書いた上申書。「事蹟考」に収録されている。また「近藤巡夷録」等の名で各所に写がある。

129 4 屋敷替ニ付口上書（草案）

一通

文政八年二月（二十二日以後）のものか。（三田村抱屋敷の地境について百姓半之助との故障に付ての吟味願で、翌年の悲劇の発端を感じさせられる文書。

九 諸家書簡

数十通にのぼる来簡は、所謂文人からのものが多く、著書の贈答、書

籍の貸借、文会への招待に関するものが大部分であるが、交際のこまやかさを思わせて興味深いものがある。差出人の説明を簡単に（）で示すが、年代未詳のため、役職の確定できない場合は・をつけて併列した。

129 1 馬琴書状 一月四日

一通

（滝沢馬琴、戯作者）自著の「水滸」（水滸画伝のことか）の代金を受取つた礼状。

129 2 立原翠軒書状 三月十四日

一通

（水戸藩の儒者）日下伏枕中、いづれ近日中に会いたい。

129 3 菅茶山書状 二月廿四日

一通

（福山藩の儒者、詩人）重蔵の大坂弓矢奉行への転任について、しばらく気力を養えと慰める。

129 4 亀田鵬斎書状 十一月四日

一通

（儒者）招待日の不参をわびる。

129 5 市橋長昭書状 四月廿日

一通

（西大路藩主）廿五日以前は日々故障。其後米訪されたい。

129 6 五山桐孫書状 二月十一日

一通

（菊池五山、高松藩儒者）「練兵実記」を借りたい。

129 7 古川吉松軒書状（末尾欠、寛政九年）

一通

（地理学者）帰府途上の重蔵と備中川辺で会うつもりが、二日違いで会えず、残念。愛用の文鎮石を形見に贈る。

129 8 18 間宮士信書状 十一日

一通

（旗本、小姓組、地理学者）依頼された用件を奥村総次に取次いだが延引。

129 9 渋江虹書状 四月七日

一通

（長伯、本草家、奥詔医師）滝川文庫での会に不参をわびる。

129 10 有馬某書状 八月廿八日

一通

五十金は間に合せよう。

129 11 貞幹書状 晩夏廿八

一通

（藤井貞幹、考證学者）滝川別園のことを白川老侯（松平定信）へ伝えたところ、近侍を代見として遣わしたいとのこと。

- 298 24 蟻川親常書状 十二月十日 一通
(中奥小姓・新番頭) 奇石と鈴を拝見して返上。「職原抄」をお目にかける。
- 298 25 寺山書状 七月七日 一通
(岡村備後守書状) 「南巡之図」を返却。
- 298 26 岩村備後守書状 七月七日 一通
(小姓・小十人頭) 「南巡之図」を返却。
- 298 27 寿山書状 五月十二日 一通
(信夫槐軒か、一橋藩士、儒者) 屋敷への招待。
- 298 28 中川忠英書状 十二月十九日 一通
(勘定奉行・大目付) 金銀錢の位、諸物の価の調がついたらよこしてほし
い。
- 298 29 大島維直書状 六月十三日 一通
(近藤重蔵宛) 本の書写に対する礼状。
- 298 30 三橋成方書状 蝦夷地関係の項に記す 一通
- 298 31 大澤下總守書状 十一月十五日 一通
(大嶋鷹川、加賀藩儒者) 弘簡錄その他書籍のことについて。
- 298 32 高橋越前守書状 六月十一日 一通
(基季、高家・高家肝煎)廿六日納会のこと。
- 298 33 萩原柳庵書状 五月廿三日 一通
(高橋重賢、文政三年三月箱館奉行) 蝶夷地からの便り。昔、共に蝶夷地御
用を勤めた頃を思い、今の状況をしるす。
- 298 34 中川忠英書状 六月十日 一通
(近藤重蔵宛) 本の書写に対する礼状。
- 298 35 松浦靜山書状 包紙并封箇 一通
- 298 36 覚書 (重蔵の草稿に付、編著書の項でふれた) 一通
- 298 37 越隆書状 一通
- 298 38 散木斎書状 七月十八日 一通
(彦根藩儒者田中世誠か) 依頼された文章の不出来をわびる。
- 298 39 佐々木花禪書状 初夏七日 一通
(池田定常、若桜藩儒居) 松崎廉堂ら風月の土の会への招待。
- 298 12 大窪詩佛書状 三月廿六日 一通
(漢詩人) 会日延引のことについて。
- 298 13 阿部正精書状 仲春念一日、初夏二日 二通
(備後福山藩主の嗣、のち奏者番・寺社奉行・老中) 前者は約束の書を届け
るのを忘れて、おくれたことをわびるもの。後者は御出発も懸々五日となつ
たが、その前に会いたい、仰せの蘭書は六七年前に購入した、山海名産は購
入した、(司馬)江漢が憔悴していて心配であるというもの。
- 298 14 常山英書状 六月十三日 一通
- 298 15 松崎廉堂書状 十月十五日 一通
(儒者) 著書「千歳山」の惠贈を謝す。希望者あり、二十通購入を希望。
- 298 16 佐藤一斎書状 重九 一通
(美濃岩村藩士、儒者) 文会の日取の打合せ。
- 298 17 谷文晁書状 四月十三日 一通
(文人画家) 依頼された画像の延引をわびる。
- 298 18 林述齋書状 (日付なし) (三月二日) 一通
- 298 19 大田南畠書状 膽月七日、七月幾望 二通
(大學頭) 前者は「平賀系図」の事。後者は「書籍考」買入の件等。
- 298 20 白玉書状 十一月卅日 二通
(幕臣、戯作者) 訪問の約束の日、病氣不参をわびる十一月の書簡と「藤波
記」を贈るという七月の書簡。
- 298 21 含雪書状 二月廿三日 一通
(大窪詩佛) 取込中に付来訪の延引を乞う。慶長年録を届ける。
- 298 22 大田錦城書状 二月八日 一通
(元貞考証学者。儒者) 不快の為、附托の事も拝見せず、不本意。
- 298 23 松平冠山書状 八月初四 一通
(池田定常、若桜藩儒居) 松崎廉堂ら風月の土の会への招待。

- 298 40 酔帰隱居書状
美人同伴の重蔵を揶揄。舟遊の招待を受ける。
- 298 41 大減少輔書状 閏四月七日（文政二年）
本屋敷類焼につき、屋敷替の場所を物色中。
- 298 42 人見磯邑書状 五月廿一日
(尾張藩士、儒者)「群書治要」を送った。
- 298 43 松平帶刀書状 八月廿三日
(書院番頭)
- 298 44 田井格藏書状 松平帶刀宛 八月念一
この二通は、格藏が、外蕃通書を松平定信に見せたところ、感称され、直々に貰いたいと代金三両を下されたので、松平帶刀に送ったという格藏から松平帶刀への書状と、それに添えて重蔵に送った松平帶刀の書状である。
- 298 45 中川雨斎書状
封紙は中川雨斎からのもの。中の書簡は常山老夫からの三月八日付書簡で、書籍三部落手、秘写の上返却する。「神龍院梵舜記」と「會府世稿」を借りたいといふもの。
- 298 46 黄雪書状 十日
黄雪退きなば再び善政行なわるまじと自分の病を歎く。
- 298 47 江東隱者書状 卯月十一日
弓袋考のこと。滝野川への招待日に不参を謝す。
- 298 48 内匠頭書状 六月廿八日
「本朝通鑑」を届ける。「讀史餘論」返上。
- 298 49 石谷周防守書状 三浦義一郎宛
(清豊、大目付) 文政二年、重蔵大坂転任の後、著作献上のことにつき在江戸の重蔵の親戚三浦義一郎へ宛てたもの。
- 298 50 筆者未詳書状 中春又八
蝦夷地へ異船漂着、ヲロシヤ船ということだが、イギリス船との風説もある。
- 298 50 筆者未詳書状 十月廿八日
水原氏一件。
- 298 50 筆者未詳書状 八月七日
美酒の礼。
このほか
- 298 50 筆者未詳書状 六月廿三日
雨降らば降れ、風吹かば吹け。英名をおとされぬよう。
- 298 50 筆者未詳書状 六月廿三日
（水戸藩の重職）詩作、新富士山、金銀図録、自作の神仙史贊のこと。
- 116 源公園書翰
長崎在勤中の重蔵にあたたもので、政局のうごき等が詳細にのべられており、交際の一端がうかがえる。
- 117 人見磯邑書簡 十二月廿三日、同廿四日
また、これらの文人たちは、重蔵の転任に際しては送別の序や詩を贈った。今、「遺書」¹⁰にのこるそれらの作者名をあげるにとどめる。
- 172 滋江虬、173 人見磯邑、174 魚嶋直、175 西川國華、176 中原包貞、177 谷麓谷、178 須山昇、180 源公園、181 秦世寿、182 大関寛居、183 源禮、184 井上四明、185 榊原敬文、186 田南畝・犬塚印南・大田鯉作（合作）、187 浦池潛、188 天外道人（嘯月）、189 源頼紀、190 南部東堀（布片と歌）、191 秦鼎、192 植木玉崖、193 大関増陽。
- 122 13 「日前高樓看戲之際云々」（草案）
二月十日付 楊樹堂にあてて、近藤守重・清水好長・松崎英利・村上義監・兒島雅輔・小林慈正連名の漢文の書簡で、餌脯一点、雨繖五本と石を贈る時のものらしい。
- 十 その他
- 36 経義三章辨書 二月廿日
学問吟味
33 歴史二條辨書 二月廿四日
この二点は、寛政六年二月、聖堂で、学問吟味を受けた重蔵が、帰宅して復習したものらしいが、自分の間違いを反省した記述もあって興味深い。
- 297 10 正統文書「先達而下候」云々（草案）
経済問題
上方と江戸の相場の違いの問題点をのべ、統一の必要を主張する上申書。

書誌に関するもの

122 3 雜稿「成文英莊子注疏云々」

諸家所録の該本の巻数が一致しないので、調査したもの。

123 滝野川に関するもの

遊滝川記

文中天明五年三月の記がある。重蔵十五歳の作であろうか。

一枚

289

源氏発祥之沿革

滝野川が東国武士としての源氏の戦勝地であること、自分にとって因縁の深い地であることをのべる。

一枚

87 滝川文庫図

重蔵の滝川文庫の庭園を名所圖会風に描いたもので、一枚は彩色図。印刷頒布の計画があつたのかもしねれない。

一枚

294 古物由緒書

文政二年三月滝川文庫に宝物として収めた笈、弓、仏像についての記述。

一枚

66 身禄行者略伝

富士信仰の行者の伝記。

一枚

295 富士山之記

富士を信じない自分が、富士山を信仰する所以をのべる。

一枚

86 鎌崎富士眺望之図

名所圖会風の描き方で、五人の画家による四枚の版下と、扇面形下絵で、中

一枚

122 1 雜稿「東武鎌ヶ崎乃富士山云々」

名所圖会の文章になぞらえた鎌崎新富士の案内で、重蔵の筆跡で書かれた文章。文末欄外に「身禄行者第三世甲斐国吉田中雁丸應重寿梓」とある。

一枚

以上の二点を合せ見ると、これを印刷して頒布する計画があつたのではないかろうか。

植物に関するもの

47 推葉草木之部 伍

製作年代不明の小本だが、植物の押葉に名をつけたもの。彼の関心の一端(1)を垣間見ることができる。

時計に関するもの

一冊

14 フルロージイ刻割

西洋時計の数字に日本の刻を記入した図。

小型のメモ風なもの

垣間見ることができる。

43 正斎掌記

垣間見ることができる。

82 見聞日志

垣間見ることができる。

109 掌記

垣間見ることができる。

一枚

122 2 雜稿「叙」（文政庚申春正月）

ほかに

122 11 雜稿「正斎近藤先生有意再興金沢文庫云々」

ほかに

122 14 雜稿「武徳大成記慶長十九年四月條下」

一枚

122 15 雜稿「諸宗僧諸技芸ヲ試ミ給フ事」

一枚

122 16 雜稿「先於食朝廷云々」

一枚

122 17 官職田舎辨疑 寛延四年五月

宝曆三年の記録の写。

一枚

122 18 雜稿「生祠」

一枚

122 19 雜稿「聖經を取て詩徳の料となし」云々

一枚

11 伊豆七島明細譜

一枚

一冊

- | | | |
|--|------------------------------------|------|
| 35 小田原北条分限帳 | 写本 | 三冊 |
| 37 越藩拾遺錄 | 写本 | 一冊 |
| 38 飛驒国寺院本末并所付在々村数帳 | | 一冊 |
| 39 御譜代家錄 | | 一冊 |
| 41 律令要略 | | 一冊 |
| 49 東照宮祭礼儀式次第 | | 一冊 |
| 64 京攝童子遊び歌 | | 一冊 |
| 68 麋藩名勝考 | | 一冊 |
| 79 韓非子 | <small>第六解老第十一
第七論老第十二</small> | 一冊 |
| 111 古今帝系覧 | <small>(井上勝凭輯の写)</small> | 一冊 |
| 113 御老若開門記 | | 一冊 |
| 114 享保録正編 | | 一冊 |
| 123 正齋手記 | <small>(荻生茂卿家譜抜書)</small> | 一冊 |
| 171 德川家系図 | | 一枚 |
| 195 諭阿媽港書 | <small>林道春作</small> | 一枚 |
| 地図絵図類 | | 一枚 |
| 91 海瀕舟行方角之弁并路程 | | 一枚 |
| 127 神尾若州廻村絵図 | | 一枚 |
| 168 海路図 | <small>(瀬戸内海)</small> | 一枚 |
| 169 海路図 | <small>(長崎ヨリ大坂ニ至ル)</small> | 一枚 |
| 124 赤水日本地図 | | 一枚 |
| 299 奥州街道図 | | 一卷 |
| 長久保玄珠(赤水)の作、安永四年序、新刻日本輿地路程全図版本。 | | 一卷以郡 |
| 江戸より日光までの道中図の写本、彩色。奥書に、「右日光道中図」である。
代之本写畢、文化十二年正月近藤守重児守高写之」とある。 | | |

その他

- 74 御入用拂高大積 貞享三年

(戌九月)

- 75 御入用拂高大積 貞享三年

(戌九月)

この二点は幕府勘定所の公式の控か写本で貴重な史料であることが藤田覚氏の報告により明にされた。なぜこれが「遺書」の中に残っているのか、今後の課題である。

- 73 御尋之趣御答申演候條々

一冊

文化二年三月の「領海江異國船漂着之節常々手当之事」、「領海江唐船漂流相見候節打拂役人船員數武器等之覧」等の写である。

- 72 朝鮮国王宛書簡 文化八年(写本)

一枚

十一 明治以後の史料

「近藤翁書類」

福井萬寿吉

三上博士殿

」

とするされた厚紙に包まれた一群の史料がある。これは、明治四十四年以後の写にかかるもので、明治四十四年九月十五日故近藤重蔵に正五位が贈られた時の示達・辞令の写と、大正元年九月近藤会で作った「近藤翁遺物謄本」(弓、鏡、送平山行藏文)と、同じ時に作ったとみられる「近藤重蔵様御登り道中行列帳」「近藤様御容体書」の写本である。

附記

なお、史料編纂所蔵書の中、近藤重蔵史料として、次のものが挙げられる。

- 3071.61
24 正齋雲霧集
一三三
三冊

奥付に、「近江蒲生郡日野町野東三郎氏所蔵、大正十年三月影写了」とある影写本である。林述斎、古川古松軒、阿部正精等および重蔵の書簡合計一〇六点を収めていて重要な史料である。

2041.38
3 「鎌丘実録」八丈実記 乾・坤

重蔵の長男富蔵が記した八丈実記の一部分で、奥付に「明治二十六年二月東京府藏本ヲ写ス」とある。目黒三田村の重蔵抱屋敷の新富士と、殺傷事件、処分のこと等が、詳細に、読物風に記されている。

5343 40 弘文荘名家真蹟図録(所収) 昭和四十七年刊、

近藤重蔵自筆書簡 鈴木白藤宛 九月廿九日

一通

書物奉行時代の同僚鈴木岩次郎宛。借用の書物のこと等。文政二年と推定。

一通

市橋下總守長昭自筆書簡 近藤重蔵宛 七月十八日

一通

二条城に勤務中の長昭から、蝦夷地出張中の重蔵に宛てたもの。

一枚

1005 151 近藤守重東蝦新道記

他二点に合綴のレクチグラフで、昭和十二年九月、東京市中山久四郎氏所蔵の一
幅三枚(拓本か)を撮影したものである。「蝦夷東北之徵」にはじまる

寛政十一年十一月朔日の東蝦新道記の旧板(十勝神社に奉納したもの)がい
たんだため、万延元年橘正豊・西正友等によって再建されたものである。

一枚

このほか本所以外にある史料についての調査は未完であるが、今まで
に知り得た主なものを左に掲げる。

〔内閣文庫所蔵史料〕

重蔵の献上本(紅葉山文庫と昌平坂学門所への)を中心に、著書多数が收め
られている。主なものの解題は福井保「近藤重蔵関係文献解題」(『内閣文庫
書誌の研究』所収)を参照されたい。

〔市立函館図書館所蔵史料〕

近藤重蔵書簡 古川古松軒宛 寛政十一年六月廿一日(原本) 一通

一通

「近藤守重事蹟考」に収録されている。各地に写本がある。本誌別掲鈴木圭
吾氏報告を参照されたい。

近藤重蔵書簡 立原甚五郎宛(原本) 寛政十年三月晦 一通

一通

蝦夷地出張の従者として木村謙次か、武石民蔵をよこしてほしいとの依頼
状。

蝦夷地図式 乾・坤

乾は、享和二年二月の近藤守重識語によれば、アイヌ人からの聞き取りによ

二冊

り従者石川某に図せしめたという、蝦夷地樺太からウルップ島までの図。
坤は、寛政十二年七月廿八日の同じく識語によれば、この時エトロフ島シベ
トロにおいてアイヌ人イチャンケムシから聞き取つたチンプカ諸島(千島列
島)の地図を図したものである。ともに裏表紙に木村家蔵印がある。

〔北海道庁総務部行政資料課所蔵史料〕

木村子虚筆記

寛政十年四月、重蔵の従者となつた木村謙次の日記の写本で、その日程や謙

次の目にうつった重蔵の人物や行動がえがかれていて興味深い。

代紳録(近藤重蔵) (写本)

木村謙次が重蔵の荷物一式を記録したものである。

〔早稲田大学図書館所蔵史料〕

近藤重蔵申渡一件 文政九年十月六日(写本)

一冊

重蔵・富蔵をはじめ、三男・四男・家来までの申渡である。

〔東京大学総合図書館所蔵史料〕

異国船渡來年表(自筆本)

一冊

内題「異国船渡來之度書付写」。慶長元年より文化四年までの年表で、寛政
十年九月提出した分に増補して文化五年二月に提出したものの控で、「渡部

文庫珍藏書印」の印がある。

〔近藤重蔵翁頭彰会所蔵史料〕(滋賀県高島郡高島町歴史民俗資料館保管)

送平山子龍文(自筆)

平山潜の謫せられた時に送つた序。

近藤重蔵様御登道中行列帳

一卷

文政九年、大溝へ送られる時の藩の役人の記録。「幽囚後の近藤重蔵」参照。

近藤様御容體書

六月四日から九日までの「御医師共」の記録で、昭和五十八年同会刊「近藤

(横田三千太郎氏所蔵)(滋賀県高島郡高島町)

白山郷約

富蔵の所持していた重蔵自筆本。

一冊

以上で近藤重蔵史料に関しての報告を終るが、まだまだ調査洩れの多いことをお詫びしたい。重蔵の自筆書簡その他の史料が、どこかにひつそりと残存しているのではなかろうか。御教示を賜れば幸である。

註

(1) 村尾元長「近藤重蔵事蹟考」(国書刊行会編『近藤正齋全集』明治三十八年刊所収)、浅見安左衛門・東野善一郎共編「幽囚後之近藤重蔵」(同書所収)、森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』(昭和八年刊)、福井保「近藤重蔵関係文献解題」(『内閣文庫書誌の研究』(昭和五十五年刊)所収)他。

(2) 近藤重蔵翁顕彰会所蔵「近藤様御容體書」によれば、重蔵の死は、六月九日未ノ下刻となっている。一説に六月十六日とされるのは、幕府の検死が、七月十六日に行なわれため、その一月前ということにした為といわれている。

(3) 「近藤重蔵事蹟考」。

(4) 近藤重蔵「勸書」(『近藤重蔵事蹟考』所収)。

(5) 木村謙次「北行日録」は、水戸の医師木村謙次の、寛政五年の蝦夷地踏査の記録である。高倉新一郎著『蝦夷地』八十八頁に、「木村謙次の北行日記」とあり、記事内容が「北行日録」と類似している。「北行日記」は或は「北行日録」の別名であろうか。重蔵は寛政十年三月、知己の水戸の儒者立原翠軒に書簡を送り(この書簡は函館市立図書館所蔵)謙次が民藏を従者に乞い、容れられ、謙次が下野源助と名をかえて、随行することになる。

(6) 村上三郎右衛門常福については天明四年七月一日奥右筆村上常福、私墾の田三百五十石の地を寺社奉行松平資承にわかつことをゆるさる(徳川実紀)、天明六年四月十二日勘定吟味役、天明七年八月廿六日、御役御免差控(柳營補任)、辞職して寄合となる、寛政十一年二月廿八日蝦夷地の事承り、享和二年三月六日蝦夷地の事ゆるされ(実紀)等の記事がある。

(7) 田草川伝次郎にはこの時の記録「西蝦夷地日記」があり、昭和十九年中山利国編で石原永龍堂から刊行された。

(8) 本史料の奥書に、次のように記されている。

「右、五経定本開版及正齋翁履歴二通
本書ハ孰モ王父正齋翁自筆之草稿ニ係ル、家士人福島県奉職中明治六年頃、當時県令安場保和氏、翁自筆之物ヲ懇請ス、仍テ大人之ヲ贈ルト云、十二年余福岡法衙ニ転シ、安場氏に会晤ス、同氏本書ヲ戻サンコトヲ以テス、余之ヲ同家ニ留メ其写ヲ得シコトヲ求ム、同氏擬筆ニ巧ナルモノヲ撰ミ、一本ヲ写サシメ、余ニ之ヲ送ル、明治二十五年愛妹富志子永沢氏ニ嫁ス、其卷ヲ贈リ更ニ一本ヲ自写シテ之ヲ家ニ蔵ス、其本書ナキヲ疑ハソコト恐レ、聊カ茲ニ附記ス、
于時明治二十五年五月 龍眠 近藤昂蔵識」

(9) 文政九年(一八二六)五月一八日 目黒三田村の抱屋敷で、隣家の百姓半之助と地境等の争から、重蔵長男富蔵が、殺傷事件をおこし、十月、重蔵は、家改易、家事不取締のかどで近江大溝藩主分部家へお預となつた。

(10) 「鎌丘実録」の「新富士権輿」によれば、目黒の丸山富士の地を望んで

断られた重蔵が、近くの三田村に絶景の地を求めて、五丈余の築山をつくった。これが新富士、丸山が元富士と呼ばれ、見物人で賑つたという。

(11) 注(1)に記した「幽囚後之近藤重蔵」によれば、大溝の獄舎にあつた重蔵は、野外の草花を集めて「江州本草」三十冊を著したという。その書を、近代になって、この地方の学校で教育に使つていたという伝聞もあるが、現在は幻の書となつてゐる。

(12) 本史料については藤田覚「元禄期幕府財政の新史料」(『史学雑誌』第九

十編第十号)に詳しく紹介されている。

(13) 『新撰北海道史』第二巻通説一、四二二頁以下参照。